

# 「古事記の謎」

中小企業診断士・街の古代史研究家

津田 征八

経歴 1964年：同志社大学工学部卒、  
新明和工業(株)入社。  
：新製品開発担当、設計課長、  
設計部長、副工場長。  
1999年：同社子会社の取締役。  
2003年：定年退職。  
定年後：日本古代史の研究にはまる。  
日本書紀研究会会員、SGC歴史  
研究会主幹、牛久史談会会員。

## 1. はしがき

「古事記」は712年に完成した日本最古の歴史書で、8年後につくられた「日本書紀」と比べると、神話部分に力点が置かれている。

序文には、「天武天皇が稗田阿礼に『各豪族たちの家に伝わる天皇家の系譜や家伝には間違いが多いので、それらを集めて整理し、後世のために習誦せよ』と命じ、その後、太安万侶が元明天皇の命を受けて、文書にして天皇に献上した」とある。

さて、この天武天皇とは？・・・。唐・新羅の連合軍に侵略されて滅亡した百済の再建を夢見て、朝鮮半島に大軍を送り、戦いをいどんだが結果は完敗で、日本に国家存亡の危機を招いたとされる天智天皇の、実の弟だといわれる人物である。

天武は、天智が病に倒れ、大津の宮殿で「あとはお前に任せたい」と後継を頼まれた時、即座に兄の申し出をことわり、病気回復を祈願すると言って出家し、吉野の山奥に隠棲した。しかし兄の死後、その子の弘文が天皇になるとすぐ兵をおこし、弘文天皇ひきいる朝廷軍を琵琶湖で滅ぼし、甥を自害に追いやり、天皇になったとされている。

しかしこの天武は謎の多い人物で、平安時代の文献によると、兄の天智より4歳も年上らしく、したがって天武は天智の弟ではないと主張する多くの研究者がいる。また「日本書紀」には、天武が晩年、病気になった時、家臣がその原因を占わせると、天皇が持つべき三種の神器の一つ、草那藝剣にたたられている事がわかり、急いで剣を熱田神宮に奉納したとある。

従って、天皇としての正当な血統を持たない天武は「古事記」「日本書紀」の作成を部下に命じ、権力のある間に正史を作り、自分の天皇としての正当性を文章にしておきたかったのではないかと主張する研究者がいる。

## 2. 古事記の謎

このように、序文から謎が満載の「古事記」であるが、本文を読んでも、いたるところに謎が散見される。

まず、最近まで、「古事記」に書かれた神話は単なるつくり話で、歴史的な価値は全くないと考えられて来た。

例えば、八岐大蛇を退治した須佐之男の話も、出雲の国を造った大国主の話も、その他多くの神話が単なるつくり話だとして片づけられてきたが、私にはそれらの神話の裏には、実は、太古に実際に起きた史実が隠れているように思えて仕方がない。

## 3. 八岐大蛇の謎

出雲地方には、「古事記」が作られる以前から、須佐之男をまつり続けてきた沢山の神社がある。高天原で乱暴を働いた須佐之男は神々に追放されて、出雲の鳥上と言うところに降りてくるが、そこで、八岐大蛇に食われそうになって泣いている櫛名田比賣親子と出会い、八岐大蛇を退治して二人はめでたく結婚する。

よく知られた神話だが、そもそも八つの頭を持ち、毎年生娘を食べにくる大蛇とは一体何だろう？

■須佐之男と八岐大蛇の図



(「日本略史之内 素戔嗚尊出雲の簸川上に八頭蛇を退治したまふ図」島根県立古代出雲歴史博物館所蔵・同館写真提供)

出雲を流れる斐伊川<sup>ひいかわ</sup>は、昔から暴れ川と言われ、八つの支流を持ち、よく氾濫を起こし、古代の人々の米作りの妨害をしてきた。

洪水が起こるたびに、人々は神の怒りをしずめようと、神への「いけにえ」の生娘を川に投げ込み、天変地変をやめてくれるよう神に祈った。次に洪水が起これば、櫛名田姫が「いけにえ」にされるはずだった時、須佐之男が治水工事をして暴れ川をしずめたので、櫛名田姫は死なずにすんだ。そこで人々は心から須佐之男に感謝し、彼の死後も社をつくって、何時までも彼をまつて来たのではないかと、という説があるが、私もこの説に大いに共鳴している。

#### ■斐伊川の図



(出典：斐伊川漁業協同組合HP)

須佐之男は「古事記」では天から降りて来たと言われているが、「日本書紀」には、朝鮮半島からやって来たと言う異説が紹介されており、古代、日本よりも文化の高かった朝鮮半島から、治水技術をもってやって来た男達が、出雲の人々を救った。・・・という史実があったのではないかと、思えて仕方がない。

#### 4. 出雲王国の謎

また、大国主は、よく知られるように、皮をむかれて死にかけている「いなばの白兔」に治療方法を教え、命を助けてやる慈悲深い神さまだが、そのあと、たくさんの兄たちのしつこい虐待を受けて二度も殺され、その都度、母の助けで生きかえり、黄泉の世界へ逃げて行く。そしてそこで、

須佐之男と出会い、色々な試練を受けて強くなったあと、須佐之男の娘を嫁にもらって地上にかえり、虐待をした兄たちを屈服させ、そのあと、ガイモの船に乗ってやって来た少彦名<sup>すくなびこな</sup>と力を合わせ、出雲に、豊かな国を作りあげたという話が続く。

さて、出雲は単に神話の中に出てくる国で、大和朝廷よりも古い時代に、立派な国があったはずはないとして、長い間、古代出雲王国の存在は否定されて来たが、昭和59年、出雲の荒神谷から、358本の銅剣が出土し、学界に大変な衝撃が走った。調査の結果、地中に埋められたのは紀元150年前後とされ、それらの銅剣は、出雲地方で製造されたものと見なされるようになった。

#### ■358本の銅剣



(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵・同館写真提供)

出雲風土記によると、当時出雲地方には399の神社があり、それらの神社がまつっていた剣を、何らかの理由でだれかに捨てさせられたのではないかと私は考えている。神話では、大国主は自分の作った出雲の国を天照<sup>あまてらす</sup>にゆずるが、その時、出雲にあった399の神社は祭剣を捨てて、鏡をまつるように強制されたのではないかと？

大国主が天照に国をゆずった神話は、ひょっとすると太古の史実の伝承ではないかと考えると、「古事記」の神話は単なるつくり話ではないように思えて仕方がない。

「古事記」上巻のさわり部分だけでも、このように多くの謎を指摘できるが、読んで行くとまだまだ謎がわいて来る。紙面上、それらを紹介する事はできないが、幼い頃、父に聞かされたギリシャ神話を史実だと信じこみ、古代ミケーネ文明を発掘したシュリーマンの話もあるように、「古事記」は、日本の太古の史実が書かれた歴史書ではないか？という見方で読んで見ると、思いもかけない未知の発見が出来るのではないだろうか。

■この「つくばのシニア人材紹介コーナー」は、つくば市が2008年度から推進している「つくば市OB人材活動支援事業」に登録されている研究者・教育者の方々より寄稿を受けて作成しています。現役を一旦引退されてもいつまでも社会発展の牽引力となって活躍をされている方々の研究実績や業務経験の一端をご紹介させていただくものです。